



Title	国民社会の研究 第16巻
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Issue Date	1962-04-14
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/77585
Type	manuscript
Note	国民社会の研究各論 第1章：序説生活構造序説 『鈴木栄太郎著作集 7 (国民社会学原理ノート)』を出版した際のソースとなった原稿である (同書内での言及による)。
File Information	I019_0116.pdf



[Instructions for use](#)

26

16

NOTE BOOK

MADE OF FINEST PAPER
PREPARED IN TOKYO

國民社會の研究
第十六卷

昭和二十七年十一月七日

A4

16

目次

戦場が世帯をリットしている家
市民の生活が都市の模範に依るべき
模範子における支配的模範は何か
模範子の関係の統制

日本の地域社会における都市の発展
津田左幸博士の史観

都市の発展の仕方の都市の位置と役割

都市の模範の中核に基盤的なものとして日本経済の発展
都市の奇工業模範

26 23 21 18 17 10

職場が世帯をリードしてゐる家

職場が世帯を引オつてゐる家や
私生活の様な場面に認めらるゝ家も
ある。生活時が職場中心（主要生活時
場）とするのは、積年の存在長職場
時々の長さ、世帯内全人口の生活時子
口及び職場時子の割合等、若世帯
新住宅及び都市別住宅、又特
殊別住宅の比較。

(二) 住居未満時が職場中心の傾向
ある程しく就職時場合
の轉任の場合

(三) 都市人口集中の要因は就職のため

2

a 都市は多様な種類の生業のなすところ
 農村には生業が既定のもののみあり
 1. 青年教育が農業の継承を目的とする都市本位の
 教育と、高学歴の教育は道徳的職業
 と地域経済の発展にあり

都市の機關の中特に経済機關
商業機關、工業機關、技術機
關の三者に日民生活は依存
すべしと云ふ大である。

生活が都市の機關に依存してゐる

日民は今では商売を賣子とわしりて
一日も平定な生活は出来ない。その何
れの高をも都市の工場と事業と都
市の商業生活等によつてのみたゞれる。
都市の機關の活動に依存するもの
型には忠民もさう生かす片断な
なさい。

今日では都市はもう第一の中心地
に食料を供給したつても、即ち金口
民が商工業者よりかりのきき都市に在り
たつた生活して行けし見通しは
充分である。商工業のほうは先述の

例を以て決して不安定なものではない。
非難はあつたが、この大勢過激なものは日本
内が始終自主です。そして中東としさう
に堂伸しつゝいかしうそんなやうな事だ。
今日では金の口は都市の生業に依
存して生活してゐる。それを決して置く
をどうする。日本の食料を食ふのは
わが国大民の食料にすぎない。

今日日本の国民の生活の中概をわ

る。これは都市の概図である。中概

は概しては姑く除いて考えよう。位

である。農村は概しては生活の経路的

構成員である。け水としてこの程度部
分は矢張り不可欠の後部部分である。
これは影の形にその様には和後部可
の後部部分である。後部部分の
東部部分である。け水と^{理代}東部部分におい
て何れか他をリートする立場にあるか
と云へば機同である。五よあるである。
機同にはけ不影の存在後部か有る
け水は^{け水}け水と骨組を知らぬに
は機同の規模や精選による^{自然}自然
後部の規模や精選が完全であるか
け水に^{精選}精選の存在を^{精選}精選
介

の位思しや精進によつて白米は位居の如
きも精進を怠りし得よと思ふべし

ナドセバ

6

工業の

故に商業(銀兩業) 技術業(井ノ口業)

運輸近代の四種の機関に口民

生活の大綱を記す(大出業) (大出業)

商業的機関の大綱(大出業) (大出業)

の配里に口民を生活の骨子と

見よ(大出業)。機関の大綱は都

力人を教下見よ(大出業)。

十一日迄

成員が今齋 更新する力は七百二十年
を要するに必要、
全部が就成員にあり、これは五百六十年を
要する。

るいは七百二十人の故で毎年一人づつと
あるに必要、^井 三百六十人に一人づつ、毎年

をわす事による更新される。それによる

過程による自然形成の更新は大勢

においてはその末の状況による更新と

強と差異はなにかへ、社会意識

による相互拘束の因の科学的発展

はかしの如き自然更新による更新

共に存続して来たのか、その^不断

の過程と現在が連続しての精神

の科学的流れに頼るに必要の

知識がある。国家としての優位や

意志による国家と共産党がそのまゝに
存続するとかよの下達^{自派}な^り五人の金庫
が現職的^にに^て国^際的^につ^つ存^在し^てる^を
次に村人が^{実現}追^及して^いる^よと^よの^つ
は^然し、^現在^的に^ては^もち^ろう^とも^の
の^同任^が打^張り^をし^てる^のが^主
で、^社会^的な^内容^は時^代と^共に
少^しづ^づと^安化^して^いる^のが^主
で、^生活^的な^事柄^は自^然と^人を^かた^作
に^存在^する^のが^主で、^記録^的な^事柄^は
内^容も^大体^には^その^まま^のと^なり^か
ら^いて^あら^う、^とん^なに^大き^なな^りが^主

し時局的な「カ」を「同」にする
瞬間

「カ」に「同」にするには「カ」を「同」にする

「カ」に「同」にするには「カ」を「同」にする

大変な「カ」を「同」にするには「カ」を「同」にする

「カ」の「カ」を「同」にするには「カ」を「同」にする

「カ」の「カ」を「同」にするには「カ」を「同」にする

「カ」の「カ」を「同」にするには「カ」を「同」にする

「カ」の「カ」を「同」にするには「カ」を「同」にする

「カ」の「カ」を「同」にするには「カ」を「同」にする

「カ」の「カ」を「同」にするには「カ」を「同」にする

「カ」の「カ」を「同」にするには「カ」を「同」にする

「カ」の「カ」を「同」にするには「カ」を「同」にする

革命が... 生活の一部... 変革... 他... 國... 時...

※昨日の夕方昨日来史君愛口の可憐な
 村の歌者が今日かや俄かに民謡を
 自ら申すや、何れかへて歌かと思ひ
 思ひ痛むか、何れか、何れか、思
 るの程に、民謡の多く、何れか、思
 し、た、と、絶、心、事、中、さ、れ、め、の、下
 と、絶、心、事、中、さ、れ、め、の、下

悲しく

辨明を一人として、苦勞し、それ、有、其、同、の
 手段を、少く、し、お、し、な、つ、この、大、変、代、の
 處理を、此、方、急、激、内、容、の、内、下、も、何
 しか、整、齊、手、作、つ、業、の、一、部、の、こ、の
 場合、の、前、と、何、ん、か、連、絡、す、可、さ、し、の
 と、代、不、れ、は、こ、ろ、苦、し、か、下、の、一、部、の、
 連絡のつけ、様、の、在、の、様、お、大、変、代、を
 日本人は、ア、フ、レ、シ、ト、
野村流 新井流
 の、苦、勞、の、よ、う、で、神、想、を、念、に、運、送、の
 行、知、の、よ、う、で、自、己、辨、明、し、の、お、は、代、お、お、
 する、の、お、お、の、か、連、絡、し、か、大、い、お、お、
 終、を、人、先、で、互、い、に、辨、明、し、合、お、お、

14

この時代の口良体験を思ひ出し見
かよひ。

日本の社会は温玉は湯うく靴に生
きていよ。これは村松においり文下はな
く都へおうと廻りてある。

都へおうと成生は都へおうと成生
によつて存続していよ。アノりぬの都へ
は廻り村松と成生は都へおうと成生
管人におうと成生は都へおうと成生
都へおうと成生は都へおうと成生
あよ。おのりぬして日本の都へおうと成生
都へおうと成生の成生は都へおうと成生。

日本

※特に社会福祉の基盤的方

針の穂多の力にはこの点を見落す

さで出ない。アタリは社会福祉の基盤を

そのまゝホンヤリして適用するべきでない。

自給法の整備は大化の改訂以来ではない

のか。日本経済文化の状況もそこにある。

生業の若者の出入りにおける秩序も見逃

してはならない。所謂ネリトリの存在に

あ。

わが国経済の停滞が甚しくなっている。その

原因の整理を大原には託すことなし

増大して来た。江戸時代、江戸の位置

が遠く、川沿い、江戸で水がたまる

と有る。いよいよ、江戸の中心

は、いよいよ大原に移る。江戸の中心

は、いよいよ大原に移る。江戸の中心

を同じ形質で理解する。この困

難は若者である。

十一月八日

津田左右吉博士の史観

日民と民族の別についての博士の意見は一考の價いがある。

上田「日本古代の宗族」
立憲の研究 392

博士の意見には意見がある。

現代下建るまでは日民市場の成立の時代

かゝる日民の成立を認めなければ

民族体としていふのは異論あり

得ると思ふ。

都市的機園

都市的機園は結節的機園である。その構成形式より云へば生業共同機園であるといつても過言ではない。

近代制都市的機園は其の上大規模と云ふ性格を思ひより云ふ事あり。故に

近代制都市的機園は大規模の生業共同機園である。其れが都市

的である事は向端である。結節的の念に機園は自然の是も不可缺り

す。都市的機園は存在し得ないものである。其れ一回是の制作を爲す

爲せる大抵御家の生業はやむ

都市的ではない、これは田舎共同の
是例である。

近代の都市的振興は、昔は生業
共同体となり、特に融成力が
了生業共同體益こそこの地盤
大きくなり、一人の貧乏の不利
を力を囀突してそのマスの力
ほらとていふかの程である。

近代の都市的振興は巨大な
業振力体である。その特徴
を講義し、その傾向に向いて
あはと見よ、よかある。

19

十一月十四日

口尾港を内河の都市の位置と役割

他人の行為が我々の権利の及ぶもの位置

と割賦に依りて割賦の及ぶもの位置

割賦の口尾港を内河の都市の位置

その都市の位置と役割を明らかにす

の都市の位置と役割を明らかにす

活動してゐるものである。

その都市の位置と役割を明らかにす

にす。それは内河の都市の位置と役割

都市の位置と役割を明らかにす

子を仲立ちとするが、その都市の

下級果樹との関係と上級果樹との

の関係を明らかにする。その大略

21

を新しうに出来し。余の書生を
河の山村より松林を経て東京に
つたかゝりて、松林は之の一樹あり。
丸山の山村は、之の東にあり。
亦下の可成り、松林の位置を被漸
も同様である。日本銀行の
のとなりかゝり、河の調子も皆然りあり。

十一月五日

都市的機關の中特に主導的なるものと
日本の統治文化

日本の都市では統治的機關が中心の
位置にあり、他の機關を支配し、統制
し、この統治機關の周圍には他の機
關が集まる。最高級の統治機關の周
圍には他の各級の
これは最高級の機關が集まり、中級の
統治機關の周圍には他の各級の
の中級の機關が集まる。此原則
は日本の都市には原則的に適用さ
れ、守られる。統治的機關の周
圍に他の機關の存在は、必ず
し、この原則の通りである。

不特殊の明白な確信によるもの下で、

も原則は能わくは、たゞその

日本に於てある、の席に

都知人に程、直ちに都府統

同の位を示して、結果に

い、か、兩者が平解した程く少費

の何外は、わく、明白な税を存

てい、人、知、知、が、下、同、は、

二人は、ある、税、多、物、の、物、

か、津、に、あ、つ、て、四、日、市、に、な、い、税、は、

明、白、な、あ、る。それは、厚、く、経、済、の、

別、を、墨、書、し、て、い、れ、は、な、い、何、外、

生じたものである。

その際、都市の支配力を素直
するものとして統治機関とその権
と係を見逃す事は出来ない。
然るに統治機関の次に支配力を
持つ機関としては何れも機関
をあげることが出来るか。

都市の衛生機関

市民の生活は今日では都市に
あり衛生機関に依るべき事
なれば一日も生活する事は出来
ない。

衛生機関の日常の活動は直接
の支配しては都市の衛生を
の活動である。都市の衛生機関の
機関の活動はそのまゝ、その同方
内の市民の生活の実際を扱は
るべきものである。

衛生機関の機関のその後の機関の
同方から地味を分析は毎日

化すよめてはなく、大抵に因襲して
いふと云ふも、木杵。

故に曰く、民生活の骨格めとして考へ

ていふ曰く、民衆生活の社会構造の

因襲には、統治機関と共に商工業

の機関の地位と役割を記す。

標識を表示する事か、通をいふ。

ここに地位とは、上級下級、集落、社会

の系統図式の内の位置下あり

役割は、機関の因襲下あり。

上級下級は、首都を上限とし

下級集落は、地方、山、海、村、中、東、

28

エ下限とす